

歴史評論

歴史科学協議会編集

2002年

10月号

特集 歴史研究の最前線

神話と伝承——日本古代史と隣接諸学の関係
 日本中世史研究と環境史
 日本近世史研究における情報
 戦争と軍隊——日本近代軍事史研究の現在
 イスラム史は何を明らかにしたか
 アイヌ史はどこまで来たか

榎村 寛之
 高木 徳郎
 高部 淑子
 吉田 裕
 加藤 博
 児島 恭子

*

〈第36回大会準備号／歴史における社会と権力 Ⅲ〉

第1日 社会における由緒と正統性
 第2日 地域における祀りと統合

坂田 聡／山本英二
 澤 博勝／山口公一
 宇吹 暁／平川 新

*

〈歴史の眼〉「9・11」の記憶

大類 久恵

校倉書房

NO. 630

歴史評論山

第630号
(2002年
10月号)

●紹介●

石堂清倫著「二〇世紀の意味」

加藤 哲郎

本書は、九七歳まで生きて、二〇〇一年九月一日の「新しい戦争」勃発直前に天寿を全うした、石堂清倫の遺著である。本書を手にして、同じ表題の岩波新書を思い出した。アメリカの経済学者ケネス・ポールディングが一九六四年に書いた「二十世紀の意味——偉大なる転換」は、六七年に清水幾太郎訳が出ている。ポールディングは、約五千年前に始まる「文明前社会」から「文明社会」への「第一の大転換期」を経て、二〇世紀を「文明後社会」への「第二の大転換期」とした。随所にみられる「日本の発展の成功」をはじめ、当時の樂觀的トーンは否定できないが、彼は同時に、「四つの落とし穴」を指摘していた。第一に戦争、第二に途上国の経済的離陸の困難、第三に人口増加、第四にエントロピー、つまり資源・エネルギーの枯渇——六〇年安保闘争の指導的知識人であった訳者の清水は、この頃から国家主義的ナショナリズム

に傾き、日本の核武装まで説いて没するが、原著者のポールディングは、むしろ「四つの落とし穴」の理論的解明に向かい、「宇宙船地球号」の提唱者となり、クェーカー教徒の夫人とともに、地球環境問題の理解者・教育者、平和学の創設者となった。社会主義者石堂清倫の「二〇世紀の意味」は、これを直接意識したものではないが、清水幾太郎の道に警鐘を鳴らし、ポールディングの道と共鳴している。Ⅰ「二〇世紀の意味——『永続革命』から『市民的ヘゲモニー』へ」、Ⅱ「転換を果たせなかつた世紀」、Ⅲ「ヘゲモニー思想と変革への道——革命の世紀を生き延びて」に見られるように、アントニオ・グラムシのヘゲモニー概念と「機動戦から陣地戦へ」のテーゼを深めながら、西欧ではバリ・コミュニケーション以降、レーニンでは一九二一年以後、ソ連の新経済政策とコミンテルンの統一戦線戦術採用が不可避となった陣地戦の時代に、

スターリンやコミンテルン日本共産党の革命構想は対応できなかった、とする。石堂は本書で、女性運動・環境運動など日常生活の中の分子的変革の必要を内省し、ガンジーの非暴力抵抗に注目して、マルクス主義を捨てずにポールディングに近づく。Ⅳ「日本の軍部」ではアジア・太平洋戦争を回顧し、清水幾太郎の国家主義と鋭く対立する。同時に、なぜ民衆が軍部の満州事変・中国侵略に従ったのか、共産党の打倒対象とした天皇制の統合力がいかに強固であったかという「転換を果たせなかつた反省の中に、変革勢力のヘゲモニーの問題を見いだす。

清水幾太郎的歩みとポールディング的歩みの分岐点で問題になるのが、Ⅲ「転向」再論——中野重治の場合」である。初出時から大きな反響をよび、鶴見俊輔・鈴木正一・いいだももの同題の書物が編まれた(平凡社、二〇〇一年)。評者も、本書刊行直後

の「エコノミスト」誌八月一四日号の短評で、「親友中野重治を素材に、戦前共產主義運動を論じた『転向』再論」は、日本思想史に長く残る共有財産となるだろう。石堂はこの思索で、「裏切り者」「脱落者」として切り捨てられた何千何万のかつての仲間を救済した。それは、戦後共産党の「顔」であった野坂参三の晩年と正反対の深い自己批判に自己変革で、同じく九〇歳を越えた宮本顕治に歴史の審判を下すものである」と評した。実はこの短評を著者に送って夏休みの海外調査に発ち、帰国後本人の意見を聞こうと思っていたところに、フィンランドで電子メールの訃報を受け、「社会主義理論学会会報」に追悼文を書いた。その喪失の意味については、鶴見俊輔、澤地久枝、田畑稔、木村英亮らがそれぞれ述べているので、ここではあれない。

むしろ、本書の遺言を受けて、残されたものがいかに思考すべきかという観点から再論しておきたい。一つには評者なりに遺言を受けて、二〇世紀を超えて——再審される社会主義（花伝社、二〇〇一年）という書物を公けにしたからであり、いまひ

とつは、その後「わが友 中野重治」(平凡社)が刊行されて、著者の晩年の中野重治との交友がまとめられ、遺言の意味がいつそう明らかになったからである。

著者が中野重治に引きつけて「転向」を再考する契機は、いくつかある。そもそも「転向」が日本共産党では佐野学・鍋山貞親という最高幹部から始まったこと、その組織がコミンテルン信仰と「鉄の規律」で縛られ指導部にさからえない構造だったこと、当時の方針が天皇制打倒という国民から遊離した自殺戦術であったこと、「転向」の語自体官憲が案出した宣伝用語だったこと、同時代に中国共産党は劉少奇の指示でたとえ「反共啓事」に署名してでも獄中につながれ続けるよりは獄外の戦線に復帰すべきだとする戦術を採っていたこと、等々——この間旧ソ連秘密文書から戦前日本共産党の自壊というべき無惨な記録を発掘し、著者石堂に考証してもらってきた評者は、これに深く共感する。同時に、「非転向」がなぜ共産党内のみならず戦後知識人の「悔恨共同体」で大きな「権威」を持ち得たのか、「獄中十何年」の「権威」が中野

重治や山本正美の「後ろめたさ」を昂進した構造の総体が再審されるべきだと考える。

ヘゲモニーの観点からいえば、著者がグラムシから得た「機動戦から陣地戦へ」の中で、二〇世紀に社会民主主義的福祉国家の果たした役割を、正当に再評価すべきだろう。著者も本書では、西独「社会国家」に注目している。ただしグラムシの発想が、当時の軍事戦略・戦術と階級闘争のアナロジで構成されていた以上、戦争のあり方そのものが「陣地戦から情報戦へ」と変貌した二二世紀には、戦争とのアナロジから離れたガンジの「非暴力・寛容・自己統治の政治」を考えることも必要だろう。石堂清倫を「日本のグラムシ」になぞらえたい誘惑にもかられるが、グラムシの二倍以上を生きて、ソ連崩壊まで見届けた石堂には、本意ではあるまい。むしろ、二〇世紀日本のかけがえのない個性、希有な革命家・思索家・歴史の語り部として、膨大な書簡や座談会記録等、残された遺産のさらなる公刊を期待したい。

(平凡社、二〇〇一年七月刊、二五〇〇円)

(かとう てつろう)